

大学生の性意識・性行動に関する報告

～A大学の学生を対象とした調査報告～

A Report on Sexuality Consciousness and Sexual Behavior among University students :
A Survey of Students at "A" University

今 野 洋 子

IMANO, Yoko

佐々木 浩 子*

SASAKI, Hiroko

ABSTRACT

We studied the status of sexual consciousness and behavior among university students and the direction of the sex education. Research was conducted to the students of university A in the suburbs of Sapporo with the following results :

- 1) The age at which students start having sex is dropping. Students stated that the reason for their sexual behavior was to satisfy their curiosity and sexual desire more than for love.
- 2) As their sexual experience grew, so did their awareness of contraception, which was rather limited. They asked for us to use of condoms, but its effectiveness was not certain because they may lack knowledge of proper use.

The following must be emphasized in sex education :

- ① Sexual behavior requiring good understanding of partners
- ② Handling the sexual behavior
- ③ Contraceptive education

We must establish the better sex education, because sexual consciousness and behavior relate to lifestyles and future of the next generation.

Keyword : sexual behavior, sexuality consciousness, sex education

抄 録

現代の日本において、青少年の性に対する意識や価値観は多様化している。このような価値観の変化に伴い、性行動の積極化・自由化についての報告が多くみられるようになった。また、10代の女性の人工妊娠中絶数の増加や性感染症の増加等、さまざまな性の問題が取りざたされている。このような問題に対応するべく、内容および教材、指導者や具体的な展開例等を含め性教育の充実が求められている。

本報告は、大学生の性意識・性行動の実態を明らかにするとともに、現代の若者の性に関する諸問題等に対応する性教育の方向性を考察するものである。

大学生の性意識・性行動の実態を明らかにすることを目的として、札幌市近郊のA大学の学生を対象として、質問紙による集団調査を行った。

本調査から、大学生の性行動や性意識の特徴として、以下のことが明らかになった。

(1) 安易な性交

男女ともに、性交経験の年齢は若年化傾向を示しており、性交経験の増加・性交までの期間の短縮化に加え、自分本位な性交の動機が多く、性交は安易に行動化されている。

(2) 不確実な避妊

性行動の活発化に伴い、避妊の実行率は高い。しかしながら、避妊方法は画一的であり、避妊方法を正しく理解し、用いているわけではない。

以上のことから、性教育において性交の意義、性交が互いに及ぼす影響などについて教えるべきであると考え。また、コミュニケーションの手段として、人間関係づくりのひとつとしての性、すなわち「ふれあいの性」について重点を置いて教える必要がある。また、同時に性的欲求の対処法について、科学的に扱うべきであろう。

避妊についても、その意義と具体的な方法を、発達段階を踏まえて、社会文化的かつ科学的に教え、意識の向上を図る必要性を痛感した。

性教育が、現在の学生の性行動・性意識を規定するのみにとどまらず、次代を担う子どもたちを創る原動力であることを踏まえ、豊かな性と生の教育を構築していきたいと考える。

キーワード：性意識 性行動 性教育

I はじめに

近代の日本における社会環境や生活様式の変化は、少子高齢化や人間関係の希薄化、高度情報化・国際化を生み出した。これらは、思春期の子どもたちの価値観を大きく変え、子どもたちの意識や行動に深く影響を及ぼしている。

特に、現代の青少年の性に対する意識や価値観は多様化しており、青少年の性意識および性行動は著しく変化している。このような変化に関して、「青少年の性行動は開放的で積極的な傾向を示す」ことが数多く報告されている。¹⁾

また、高校生の性交経験率が上昇傾向にあり、性行動の「低年齢化」が指摘されている。²⁾

さらに、女子の性意識・性行動に関する特徴として、女子の性交欲求が上昇傾向にあることや、女子の性行動の積極化・自由化など、女子の性意識や性行動の変化についての報告が多々みられるようになった。³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾

これらのことに加え、現在、日本では、人工妊娠中絶の増加¹⁾や性感染症の増加等、深刻な心身の健康障害が引き起こされている。このように、さまざまな青少年の性の問題が取り沙汰されており、これらの問題に対応すべく、指導者や指導法および教材を含めた性教育の充実や、性の問題への支援体制の確立などが求められている。

学校教育に関して、平成9年の保健体育審議会答申で「性の逸脱行動」が児童生徒の健康課題としてあげられるようになった。現在、新学習指導要領では、保健に関して「的確な思考・判断に基づいた意思決定と行動選択の力を育てる授業」の展開が求められ、保健学習においても「生きる力」を育てていくことがあげられている。また、学校教育だけでは改善できない問題に対し、学校外の専門家や地域の教育力とともに、より具体的に取組もうという視点から体制も整備されつつあり、教育内容の変化も見られるようになってきている。

現在、学校教育においては「性に関する指導」から「性教育」という名称に変わったばかりであるが、求める内容は狭義の性に限定されたものではなく、人間の性と生に大きく関わるものである。

以上のことを踏まえながら、本報告では、大学生の性意識・性行動の実態を明らかにするとともに、現代の若者の性に関する諸問題等に対応する性教育の方向性を考察する。

なお、2002年7月20日に北海道心理学会において、また、同年9月14日に全国学校保健学会において、本報告の一部について発表を行った。

いうまでもないことであるが、性に関する調査は、多くの方の協力なしには実施することが難しい。何より、高度なプライバシーに属する性の問題について、情報を提供していただいたA大学の学生の皆様、調査に協力していただいたA大学の教職員のみなさまに心よりお礼を申し上げます。

Ⅱ 対象および方法

1. 調査対象

調査対象は、札幌市近郊のA大学の学生とした。

質問紙の回収率は100%であった。全て無回答の9名を除き、有効回答者数は374名、有効回答率は、98.3%となった。

有効回答者の内訳は、男子67名・女子299名、性別不明8名の総数374名である（表1）。

表1 有効回答者数の内訳

集計人数	人数	割合
男子	67	17.9
女子	299	79.9
不明	8	2.1
合計	374	100.0

2. 調査方法

調査方法として、調査対象学生に対して、集団調査を実施した。

つまり、調査担当者が教室におもむいて簡単な説明を行った後、質問紙に回答を記入してもらい回収した。所要時間は、約20分前後であった。回答にあたっては、無記名とした。

調査期間は、2001年12月5日から、12月11日とした。

質問紙における調査内容の主なものは、以下の三つである。

- (1) 性に関する知識
- (2) 性行動
- (3) 性意識

本報告では、全質問数9問のうち、2問目の質問に含まれる以下の6項目について詳述する。

- ①性交経験の有無
- ②初交年齢
- ③性交までの期間
- ④性交の動機
- ⑤避妊の実施率
- ⑥避妊方法

これらに関する具体的な質問内容については、図1に示す（図1参照）。

なお、検定については、二項分布による直接確率検定を用い、有意水準は $p < 0.05$ をもって有意差があったとした。

図1 質問紙（一部）

② ①性行為をしたことがありますか？
 1) はい 2) いいえ【いいえの人は5に進んでください】

②それは何歳のときですか？[初交]
 () 歳

③交際してから初交までの期間はどれくらいですか？（1つのみ）
 1) 1週間以内 2) 1ヶ月以内 3) 2～3ヶ月 4) 4～6ヶ月 5) 7～12ヶ月
 6) 1年以上 7) その他（ ）

④性交を行った動機はなんですか？（複数可）
 1) 自分で希望 2) 好奇心 3) 無理やり 4) なんとなく 5) お酒の上で
 6) その他（ ）

⑤避妊をしていますか？
 1) いつもしている 2) 時々している 3) いつもしていない 4) その他（ ）

⑥普段、どんな避妊法をしていますか？（複数可）
 1) コンドーム 2) 女性用コンドーム 3) ピル 4) ペッサリー
 5) オギノ式（基礎体温） 6) その他（ ） 7) していない

Ⅲ 結果と考察

1. 性交の経験の有無

性交経験の有無についてみると、「性交経験あり」と回答した者が61.8%で、「性交経験なし」は38.2%であった（図2参照）。「性交経験あり」と回答した者の方が、「性交経験なし」を上回る結果となっている。

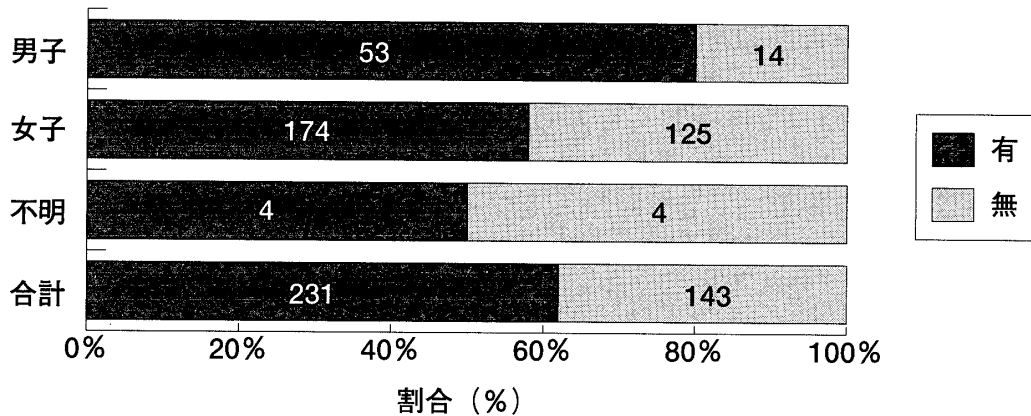
男女別にみると、「性交経験あり」と回答した者は、男子79.1%、女子58.2%であり、男子の方が女子より多い。「性交経験なし」と回答した者は、男子20.9%、女子41.8%であった。

日本性教育協会による「1999年版児童・生徒の性⁷⁾」では、高校生の性交経験者の増加が見られ、特に、女子が男子を上回る結果となっている。この調査の中で、中学生・高校生の「性交経験」についてみると、中学生・高校生の男女ともに学年が進むにつれて増加傾向を示している。特に、高校生の増加傾向が顕著であり、男子では高校2年生から3年生の間に12%増、女子では高校1年生から2年生の間に12.5%増となっている。また、高校3年生では、男子が28.6%に対し女子34.0%と女子が男子を上回る結果となっている。

また、1994年に日本性教育協会の行った調査によると、大学生の男子57.0%、女子43.0%が性交を経験しており、同協会による1999年の調査では、男子50.5%、女子62.5%と女子が男子を上回る結果となっている。この調査結果と本調査の結果を比較すると、男子は対象人数が少なすぎるため比較が難しいものの、女子の性交経験は増加傾向にある（ $p < 0.08$ ）。

本調査においては、男女を比較すると、女子が男子を上回る結果とはなっていない。しかし、大学生全体（男女合わせて）で見ると、性交経験のある大学生が増加していることが明らかになった。

図2 性交の経験の有無（全体および男女別）

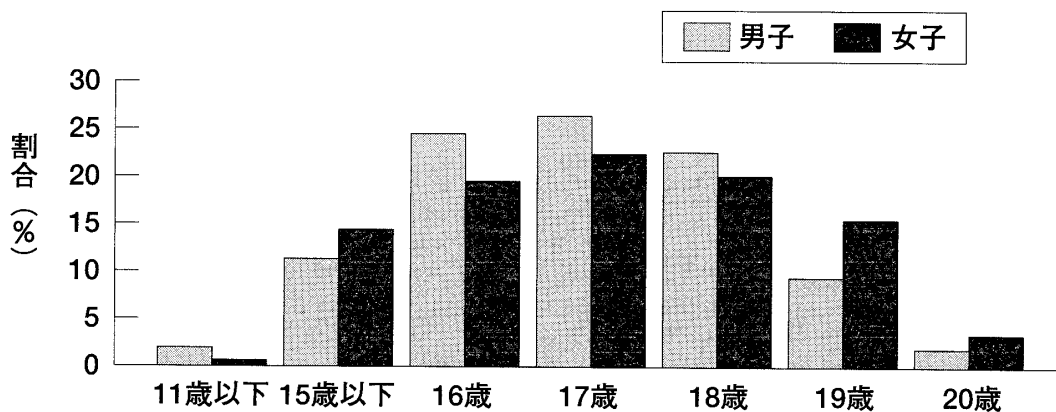


2. 初交年齢

初交年齢についてみると、男女ともに低年齢化傾向にあることがわかった（図3参照）。

初交年齢は、17歳が最も多く、男子が26.4%、女子が22.4%であった。次いで18歳・16歳であり、18歳では男子22.6%、女子20.1%、16歳では男子24.4%、女子19.5%の割合であった。

図3 初交年齢



性交経験者のうち79.2%が、「16～19歳」で、性交を経験していることが明らかになった。また、「13～15歳」で13.4%が性交を経験しており、初交年齢に関して低年齢化傾向がみられる。

男女差について見ると、本調査においては、「16歳」の時点で男女差がみられ、男子の方が初交年齢が低年齢化している ($p < 0.07$)。

なお、厚生省の2000年「日本人のHIV/STD関連知識、性行動、性意識についての全国調査」⁸⁾

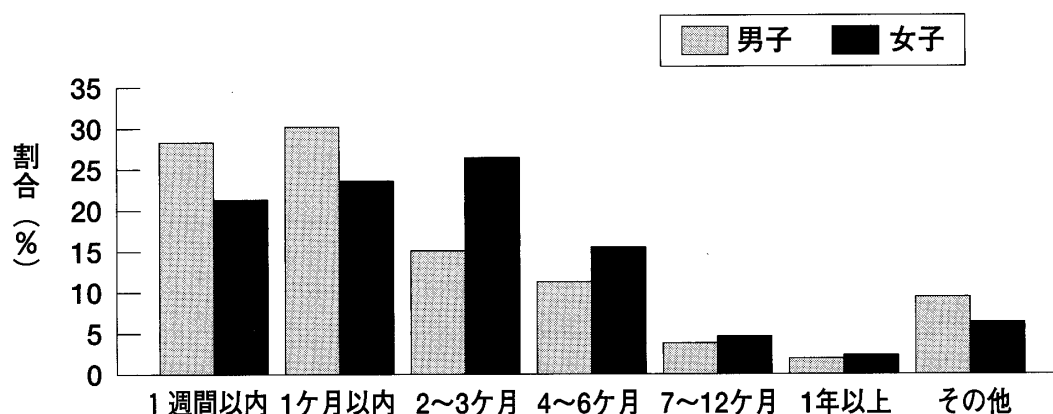
では、女子の初交年齢は、「16～19歳」が79.2%、「13～15歳」が13.3%であり、本調査と同様の傾向がみられる。

「1999年版児童・生徒の性」⁹⁾によると、「初交の相手」についての調査から、全体的に、中学生同士・高校生同士といった同年輩の相手が多い傾向にあることが明らかにされた。しかし、中学生の女子の相手として有職者、高校生の女子の相手として大学生・有職者が多いことが指摘されており、このことは女子の初交年齢の若年化との一要因とも考えられるのではないか。

3. 性交までの期間

性交までの期間についてみると、全体的に性交までの期間が短いことがわかった（図4参照）。

図4 性交までの期間



「1週間以内」と回答した者は、男子28.3%、女子21.3%であった。「1ヶ月以内」と回答した者は、男子30.2%、女子23.6%であった。「2～3ヶ月以内」は男子15.1%、女子26.4%、「4～6ヶ月以内」は男子11.3%、女子15.5%であり、7ヶ月以上になると回答者数が激減する。

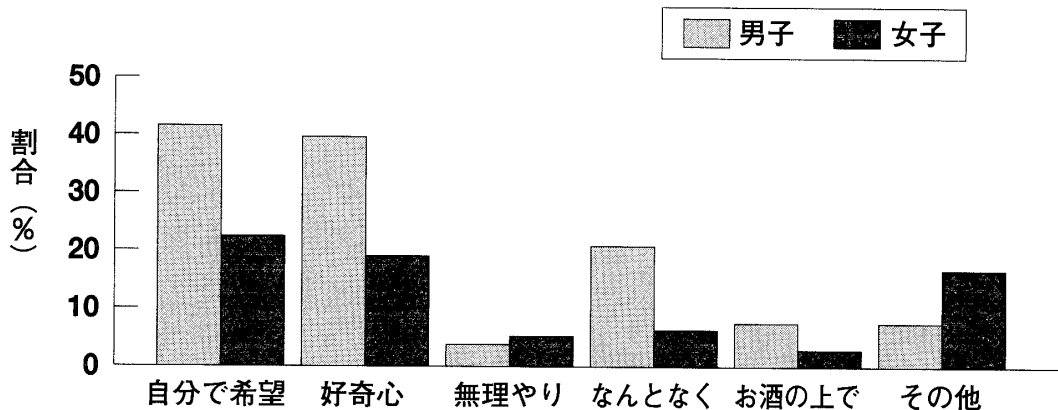
全体でみると、「1週間以内」が23.0%、「1ヶ月以内」が25.6%であり、これらを合わせると48.6%の約半数となり、性交までの期間の短縮化が見られる結果となった。

また、男女差についてみると、「1週間以内」「1ヶ月以内」「2～3ヶ月以内」という回答ではいずれも男子の方が女子より多く、性交までの期間の短縮化は、女子よりも男子の方に多く見られる。

4. 性交を行った動機

性交を行った動機についてみると、男女差が見られるものの、「自分で希望」や「好奇心」「なんとなく」などの興味本位の動機が多いことが明らかになった（図5参照）。

図5 性交を行った動機



「自分で希望」と回答した者は男子41.5%、女子22.4%、「好奇心」と回答した者は男子39.6%、女子19.0%であった。「無理やり」は男子3.8%、女子5.2%、「なんとなく」は男子20.8%、女子6.3%である。「その他」と回答した女子が11.3%であったが、具体的な理由の主なもの「相手が好きだったから」「お互いに合意の上で」などであった。

つまり、男女別に調査結果を整理すると、男子は、「自分で希望」が41.5%と最も多く、次いで「好奇心」が39.6%、「なんとなく」が20.8%である。女子は、「自分で希望」が22.4%で最も多く、次いで「好奇心」が19.0%である。

本調査では、割合に男女差が見られるものの、性交の動機は男女ともに興味本位の動機が多いという傾向がみられる。

日本性教育協会が1994年に行った調査報告¹⁰⁾では、性交の動機は、男女ともに恋愛感情に基づくものが多いことが報告されていた。また、「好奇心から」「ただなんとなく」といった興味本位の動機に関しては、男子の方が多く男女差があることが報告されていた。

「1999年版児童・生徒の性」¹¹⁾では、「性交の動機」についてみると、高校生の性交の動機は「好きだから」が半数近く、次いで「愛しているから」が多い。「遊び・好奇心」「何となく」もそれぞれ1割以上となっている。なお、性交動機については、1999年以前に調査しておらず、過去と比較できない。

また、中学生対象の調査として、「キスの動機」について聞いているが、中学3年女子を除き、男女とも四分の一程度が「ただ何となく」という理由である。学年が高くなるにつれて「遊び」が減少し、「好きだから」という理由が多くなっている。性行為のひとつであるキスが「何となく」経験されている中学生の実態から、今後「何となく」などの興味や好奇心による性交が増加することが予想できる。

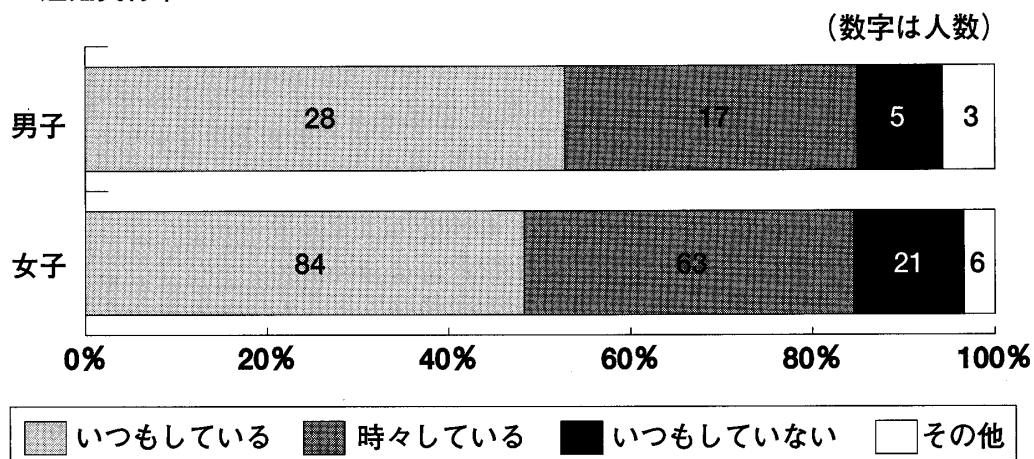
なお、高知県における妊娠経験者対象の「若年者の妊娠実態調査結果（2000年）」¹²⁾では、性交を行った動機として、10代154人中「なんととはなしに」51人と最も高く、次いで「好奇心から」39人、「わからない」28人、「自分で希望して」19人の順になっていた。20代398人中では、「なんととはなしに」152人と最も多く、次いで「自分で希望して」97人、「好奇心から」76人、

「わからない」45人、「お酒を飲んで」13人の順になっていた。この調査結果と、本調査を比較すると、本調査では「自分で希望」という動機が増加傾向にある。

4. 避妊実行率

避妊実行率についてみると、男女とも避妊実行率が高い（図6参照）。

図6 避妊実行率



男子では、「避妊をいつもしている」が53.0%、「避妊を時々している」が32.0%、「避妊をいつもしていない」が9.0%である。女子では、「避妊をいつもしている」が47.0%、「避妊を時々している」が36.0%、「避妊をしていない」が12.0%である。

日本性教育協会の1994年に行った調査報告¹³⁾によると、大学生の男子で「避妊を実行している」は83.2%、女子で「避妊を実行している」が86.3%である。

「1999年版児童・生徒の性」¹⁴⁾の「避妊」についてみると、初交時に避妊した生徒は、女子が男子をやや上回っているが、50~60%である。2度目以降の性交時の避妊の状況についてみると、常に避妊をしている者の割合は30~40%と低くなっている。また、初交時の避妊と違い、女子の方が男子よりも下回る結果となっている。一方、避妊を「したときとしないときがある」は増加している。

なお、中学3年女子の性交体験率は8%であるが、中学生を対象として「避妊に関する調査」を行っていないため結論づけることはできないが、常に避妊をしている女子中学生は、おそらく、女子高校生よりも低い割合であろうと推測される。

本調査においては、男女とも避妊実行率が高い。本調査からも、性行動の活発化に伴い、避妊を実施する者は増加傾向にある。

しかし、「したときとしないときがある」と回答した者が多いように、気分や雰囲気によって左右されるような場当たりの避妊行動が多いのではないだろうか。

現代日本における10代女子の中絶件数の増加という現状から考えても、避妊率の上昇は確実な避妊行動を意味するわけではないと考えるべきであろう。

本調査において、別の設問で「妊娠したことがある」と答えた9名のうち8名はいつも避妊をしていたにも関わらず妊娠している。

5. 避妊方法

避妊方法についてみると、「(男性用) コンドーム」がほとんど唯一の避妊方法とされていることが明らかになった(図7参照)。

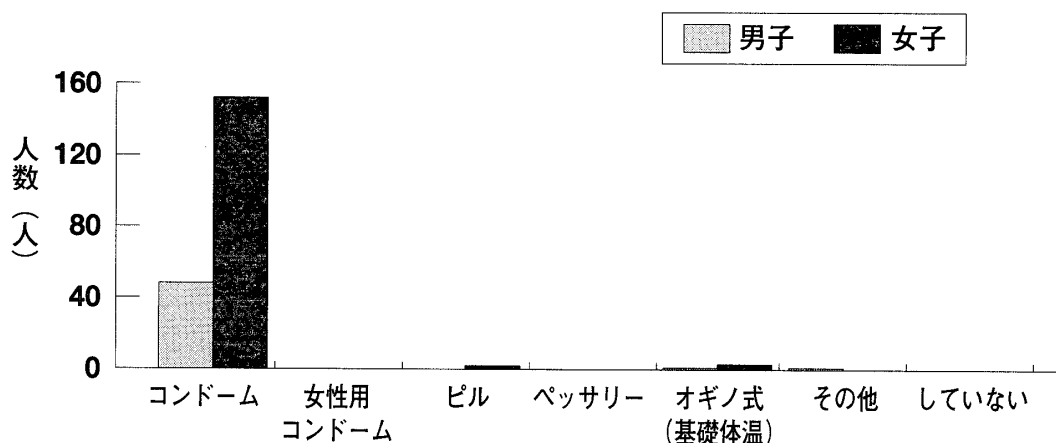
本調査では、「(男性用) コンドーム」が87.4%を占めており、その他の避妊方法は、ほとんど用いられていない。ごく少数ではあるが、1.1%の女子が経口避妊薬(低容量ピル)を服用している。

1999年9月、日本でも低用量ピルが発売されるようになり、確実性の高い避妊法が日本国内でも可能となっているが、性行動が活発な若い世代の避妊の選択肢としては普及していないのが現状であることがわかった。

また、青少年に限らず、厚生省の2000年「日本人のHIV/STD関連知識、性行動、性意識についての全国調査」の調査においても、約90.0%が「(男性用) コンドーム」を使用していることが報告されている。¹⁵⁾

避妊法においてコンドームが占める割合に注目すると、全世界で10.2%、開発途上国で5.2%、先進国24.2%であるのに比べ、日本は77.7%と著しく高く、避妊法の約8割を占めている。

図7 避妊方法



世界的な見地から、避妊方法の実態についてみると、避妊法や実行率はさまざまであり、先進国では、ピル・コンドーム・その他を含め、避妊法の選択の幅が広い。諸外国では、年代別に避妊の選択パターンが異なり、その世代の性行動に合わせて避妊方法を選んでいることが報告されている。¹⁶⁾ 中・高校生のころは、二人の性のコミュニケーションがうまくはかれず、避妊について話せないが、性交の回数は多いので、この場合、避妊ピルを選択する。出産後性交の回数が減り、毎日飲むピルの手間を省きたいときはIUDを選択、もう妊娠を望まない場合は

不妊手術を選択する等である。現代は、確実に妊娠を避け、二人のコミュニケーションをより深める関係を築き、自分の性行動に合った避妊が選べる時代¹⁷⁾であるにも関わらず、日本では、世代に関わらず、コンドームというひとつの方法にのみ頼っていることが、明らかになった。

また、前項で、避妊方法の実施率が高いものの、正確で確実な避妊が実施されているかどうかという点で疑問が残ることを述べた。避妊方法がほとんどコンドームということ併せてかんがえると、コンドームを正しく使用することができていないのではないということも推察される。

6. まとめ

本調査における結果を項目ごとにまとめると、以下のようになった。

- ① 性交経験の有無については、全体の62.0%が性交を経験しており、大学生の性交経験者は増加傾向にある。
- ② 初交年齢は、「16～18歳」が約8割を占めており、初交年齢は低年齢化傾向にある。
- ③ 性交までの期間は、「1ヶ月以内」の者が半数を占めており、性交までの期間の短縮化傾向が見られる。
- ④ 性交の動機は、「自分で希望」「好奇心」「なんとなく」などの動機が多く、安易に性交渉を持つ傾向となっている。また、自分自身の好奇心や性的欲求を満たすことが、愛情や好意よりも優先される傾向にあるともいえよう。
- ⑤ 避妊の実行率は、男女ともに約5割が「いつも避妊」をしており、約3割が「時々避妊」をしており、避妊の実行率は上昇傾向にある。しかしながら、「時々避妊」といった場当たり的な避妊では不確実であり、避妊の確実性といった点では疑問が残る。
- ⑥ 避妊方法は、「(男性用)コンドーム」が約9割を占め、避妊方法は極めて画一的であり、性行動に合った避妊方法の選択が課題となるであろう。

Ⅳ 調査結果から検討すべき性教育の方向性

1. 性教育の課題と方向性

性教育における課題を、本調査における大学生の性意識や性行動の中から考えてみたい。前章で述べた本調査によって明らかにされた問題点とは、大別すると次の二つといえよう。

(1) 安易な性交

男女ともに、性交経験の年齢は若年化傾向を示しており、性交経験の増加・性交までの期間の短縮化に加え、自分本位な性交の動機が多く、性交は安易に行動化されている。

(2) 不確実な避妊

性行動の活発化に伴い、避妊の実行率は高い。しかしながら、避妊方法は画一的で、避妊

効果については不確実な面もある。

以上の二つの課題から、「人間関係形成のためのひとつの手段として性をとらえる性教育」「豊かで安全な性行動をとることができるような性教育」が、今後めざすべき性教育ではないかと考えた（図8参照）。

つまり、性教育において性交の意義、性交が互いに及ぼす影響などについて教えるべきであると考え。また、コミュニケーションの手段として、人間関係づくりのひとつとしての性、すなわち「ふれあいの性」について重点を置いて教える必要がある。また、同時に性的欲求の対処法について、科学的に扱うべきであろう。

避妊についても、その意義と具体的な方法を、発達段階を踏まえて、社会文化的かつ科学的に教え、意識の向上を図る必要性を痛感した。

今後の性教育の基盤とすべき理論と、とりあげるべき具体的な内容については、以下に示す。

1-1. 予防行動理論モデルに立った性教育

現在、早すぎる性交体験は危険性の高い性行動につながり、初交体験が遅いと、より安全な性行動をとることが明らかにされている¹⁸⁾。

そこで、安易な性交を減少させるような「行動変容」を目標とした教育を確立させなければならないと考えた。

つまり、「行動変容」の目標のひとつは、「初交体験を遅くする」ことであり、すでに性交を体験している者については、「より安全な行動を選択できるようにする」ことである。

人間の行動は、個々人の自己評価や規範、感情、態度等が基本となり、さまざまな状況の下、障壁を乗り越えて、行動化されたとき、「自己達成できた」という自己効力感が生じる。この充実感に溢れた「自己達成できた」という自己効力感が、最も強力な動機づけとなって、行動選択の意図が生じ、行動が遂行される。

また、知識と認知の比較においては、たとえば「コンドームは、望まない妊娠を回避できる」という知識より、「性交にコンドームを使用してこそwonderful sex」という充実感を引き出すような認知の方が行動変容につながる¹⁹⁾。

このように、予防行動理論モデルの上に立ち、教育内容を構成する必要があると考える。

1-2. 性交について考えさせる性教育

現在、学校教育の場では、「性交」は教えられることのない項目である。しかし、性交について教えなくてはならない現状にあることを認識し、いかに「性交」を教材として活用すべきかを検討すべき時代にある。

性教育の中で、「性交とは何か」「性交が互いの人生に及ぼす影響」などについて教えなくてはならないと考える。「性交」は、よきコミュニケーションの手段として、用いられるべきであり、人間関係づくりのひとつと存在するべきであり、「ふれあいの性」という観点から教える必要を感じる。

まず、「性交とは何か」。科学的に表現すると、「ワギナ（膣）へのペニスの挿入」というイン

ターコースの性交が多く取り上げられる。

では、人は、なぜ、性交を求めるのだろうか。なぜ、性交したいと考えるのだろうか。このことも、科学的に説明できることである。性交を求める理由は、快感を得られるからである。なぜ快感を得られるかという、「安心できるから」である。人間は、母親の子宮の中にいたころ、あたたかく心地よかった皮膚の感触をいくつになっても記憶している。そのため、性交によって、「生まれ出る前のようなあたたかさ・安心感を味わうことができる」のである。また、パートナーとともに行う性交では、「ふれあうよさ（心のふれあい・肌のふれあい）をわかちあえるから」である。

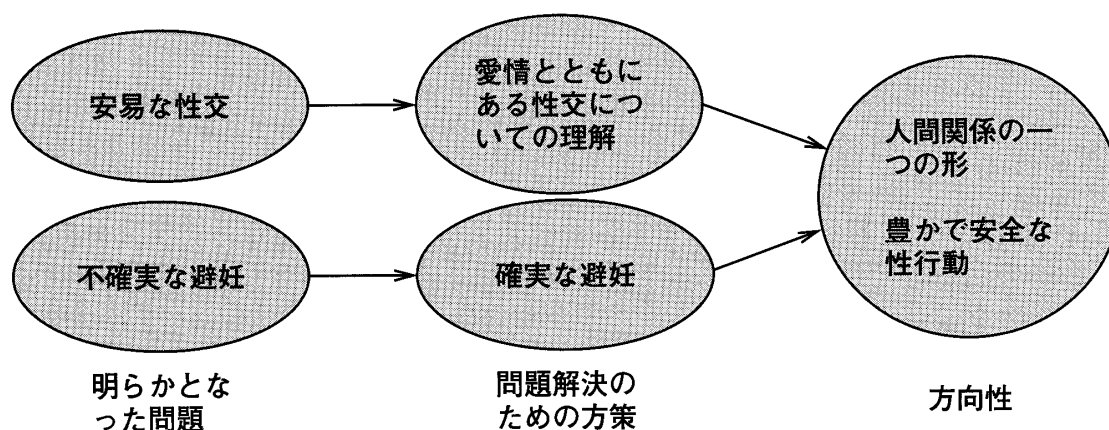
人間にとっての性交は、気分をよくし、安心させるものであり、満足感や充実感に満たされる行為のひとつである。

また、性交でなくとも、「キス」や「手や口をつかって相手の性器を刺激すること」、「肛門へのペニスの挿入」などの性行為を選択することで、性交同様の快感を得られることもあり、どのような性行為にしる、性行為を行う本人達が互いに納得して選択し、行動することである。

しかし、相手を伴う性行為でなければ満たされないわけではない。マスターベーションで、人は十分満たされる。現在、「マスターベーション」という表現でなく、「セルフプレジャー」という表現を用いる専門家もいる。このように、「ひとりで喜びを満たす行為」という美しい表現もあり、ただ満たされたいだけであれば、パートナーを巻き込まず、ひとりで行動すべきである。これは、男性であれ女性であれ、同様である。

そして、人はその生の中で性行為以外のさまざまなもので幸福感を得るものであり、満足するものであり、性行為は人間の生の一部であって全てではない。

図8 性教育の方向性



V おわりに

思春期の子どもへの性と生の教育に対し、おとなである私達は責任を持ち、その責任を果たさなければならない。

なぜならば、性と生の教育は、目の前の思春期の子ども性の行動・性意識を規定するのみにとどまらず、次代を担う子ども達を創る原動力となる。今後の社会・文化を形成する主体者の育成に深く関わっており、脈々と続く人類の歴史に大きく貢献するものだからである。そのため、性と生の教育で扱わなければならないのは、どう生きるかという人生そのものについてである。

引用参考文献

- 1) 日本性教育協会編：青少年の性行動—わが国の高校生大学生に関する調査報告、小学館、1994
- 2) 同上
- 3) 原純輔：青少年の性行動と性意識20年の軌跡、現代性教育月報、13（12）、pp.1～3、1995
- 4) 佐藤龍三郎他：高校生の性知識・性役割観・性行動に関する研究（第一報）、思春期学、13（3）pp.243～248、1995
- 5) 木村龍雄：本学学生の性意識・性行動の実態に関する研究、高知大学教育学部研究報告、第一部、第49号、pp.93～108、1994
- 6) 東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会編：児童・生徒の性、学校図書、1996
- 7) 前掲1)
- 8) リプロヘルス情報センター編：リプロダクティブヘルス、活発化する若者の性行動、日本人のHIV/STD関連知識、性行動、性意識についての調査、2001
- 9) 東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会編：児童・生徒の性、学校図書、1999
- 10) 前掲1)
- 11) 前掲11)
- 12) 高知県健康福祉部こども課・青少年福祉班編：思春期の生・性を考える会 資料3、若年者の実態調査結果について、2001
- 13) 前掲1)
- 14) 前掲11)
- 15) 前掲8)
- 16) 小田洋美：性を楽しむためにピルをゲットしよう」、Human Sexuality、No.28、東山書房 pp.70～75、2000
- 17) 同上
- 18) Family Planning Perspectives Vol.32 No 5、Sexuality Education；Our Current States、and an Agenda for2001
- 19) 内野英幸：予防教育としての性教育、健康な子どもNo.356、pp18～23、2002

注1) 日本における中絶件数の半数以上は、30歳以降の既婚者が占めている。10代の中絶件数は、実際には全体の1割強である。しかし、妊娠中期以後の中絶件数は、10代が最も多い。